



CONTENTS

- P1 巻頭ごあいさつ
- P2-4 特集：北海道の2つの国宝
- P5 トピックス：企業や市民の力
- P6 道庁からのお知らせ
- P7 縄文のまち連絡会のページ
- P8 事務局から・編集後記

巻頭ごあいさつ



北の縄文道民会議 理事 鶴井 亨

北海道文化放送株式会社
代表取締役社長



縄文文化といえば、火焰式の縄文式土器や芸術性豊かな国宝土偶を真っ先に思い浮かべる人が多いのではないだろうか。

3年前に「北海道・北東北の縄文遺跡群」が世界遺産に登録され、こうした貴重な文化財を目の当たりにする機会が増え、縄文ファンになった人も多いだろう。

少し天邪鬼の私は、縄文時代に作られた子どもの足形付土版を推したい。東京や札幌で開かれたいくつかの縄文展で毎回見てきた。

この土版は、子どもの死を悲しんだ母親が忘れないために作った、という見方が一般的だ。土版には穴が開いていて、母親が首にぶら下げたり、壁に掛けていたのでは、とみられている。

展示物としては地味で脇役かもしれないが、我が子に対する母親の慈愛の念が伝わってくる。

縄文時代は戦争がなかったと言われる。当時の人骨を調べると、ごく一部で殺傷と思われるケースがあるが、集団的な殺戮はなかった、というのが通説になっている。

1万年以上も争いが無い時代が続き、人々が同じ場所に暮らし、平和で協調的な定住文化を築き上げてきた。

時代の歯車が回り、弥生時代から戦争が始まった。紛争の要因として、狩猟採集から農耕への変化による資源の争奪、社会の階層化、武器の発達などが挙げられる。

それ以降、人類史は「戦争の歴史」と総括しても過言ではない。近代に入っても、第一次世界大戦、第二次世界大戦と続き、最新鋭の武器を駆使した大掛かりな殺戮が絶えなかった。

そして現在も、ロシアが侵攻したウクライナやイスラエルの攻撃が続くパレスチナ自治区ガザで、連日のように、一般人の命が失われている。

そんな痛ましいニュースが頻繁に流れる今、時代背景が大きく違うのは承知で、戦争のなかった縄文時代に思いを馳せるのも、無駄ではないと思う。

子どもが健やかに、すくすくと育つ社会を願わない人はいないはずだ。それにもかかわらず、国際社会は紛争や分断が広がり、その願いが危うくなっている。

ウクライナの子どもがロシアに拉致されたり、ガザで子どもの犠牲者が1万5千人超に上るという報道に接するたび、胸が締め付けられ、あの足形付土版が時折頭に浮かび、平和への希求の思いが高まるのである。



足形付土版
(函館市教育委員会所蔵)

<特集> 北海道の2つの国宝

中空土偶（愛称：カックウ）

北海道縄文世界遺産推進室 特別研究員 阿部千春



中空土偶
(所蔵：函館市教育委員会)

2007年6月、「カックウ」こと中空土偶が北海道で初めてとなる国宝に指定されました。中が空洞に作られる「中空土偶」のなかでは背丈が41.5センチと最大級。ちなみに、カックウとは「南茅部の中空土偶」の意から「茅空」＝「カックウ」という愛称が付けられたものです。

発見されたのは1975年8月24日。発見者は小坂アエさん（本年4月ご逝去）という地元の主婦がジャガイモを畑から掘り出そうとしたところ、クワがガチッと当たって出てきたとのこと。最初はジャガイモかと思って手で泥を拭いたら、目と鼻が出てきたので腰を抜かすほどビックリしたと語っていました。

発見から4年後の1979年6月、カックウはその大きさ・造形・文様配置の美しさ・土偶の性格を示す学術的価値の高さから重要文化財に指定され、その後、ベルギー王立博物館、米国スミソニアンギャラリー、大英博物館など、北海道の縄文文化の魅力を海外に広める親善大使のような役割を担ってきました。

2006年には函館市教育委員会が、カックウが出土したジャガイモ畑の発掘調査を実施します。その結果、カックウは縄文時代後期後半（約3200年前）の配石遺構を伴う集団墓地の土坑墓から出土したことが明らかになり、念願の国宝指定に繋がりました。

カックウは「著保内野土偶型式」と呼称され一つの型式として認知されています。

その特徴は顔面造形にあり、一本眉毛から垂下する高い鼻（鼻孔付き）、コーヒ豆に刻みの入ったような目と口、顎の周辺にびっしり入れられた径1ミリ程の円形の刺突紋、そして何より頭部両側に付けられたであろう筒状装飾（カックウは欠損）が共通点となります。私はこうした特徴を持つ土偶や人面装飾が付いた土器を「カックウの仲間たち」と呼んでいます。

このカックウの仲間では有名なのが東京都町田市の田端東遺跡から出土した「マックウ」と呼ばれる土偶の頭部です。「町田の中空土偶」＝「マックウ」とのこと。この土偶には、カックウでは失われた頭部の筒状装飾が現存しています。元々カックウにも付いていたと想像すると何か不思議な感じがしますね。



カックウの仲間たち

宮城県蔵王町の下別当遺跡から出土した人面付き土器（おそらくはドーナツ状注口土器）、青森県平内町の尾形遺跡の人面付き下部単孔土器の造形も秀逸です。これからは容器としての用途から中空土偶（カックウ）に変容する過程やその伝播を探るうえでも極めて重要な資料と考えています。

日本最古の国宝「北海道白滝遺跡群出土品」

北海道遠軽町埋蔵文化財センター 学芸員 瀬下直人

2023年6月、北海道白滝遺跡群出土品が国宝に指定されました。函館市の「カックウ」に続いて北海道では2例目の国宝ですが、旧石器時代の文化財としては初めての国宝となるので、「日本最古の国宝」ということとなります。国宝というと、イメージとして建造物や彫刻、絵画や工芸品などがありますが、なぜ石器が国宝に？と思った方も多いのではないのでしょうか？

その大きな理由は、遠軽町白滝にある日本最大の黒曜石産地「赤石山」です。天然のガラスとも呼ばれる黒曜石は、加工がしやすく、よく切れるため、古くから石器の材料として重宝されてきました。そのため、後期旧石器時代から、多くの人々が良質な黒曜石を求めてこの地を訪れ、石器を作っていたようです。その痕跡が、現在「白滝遺跡群」と呼ばれる旧石器時代の石器工場跡です。

次に、遺跡から出土する資料の豊富さにおいて、群を抜いている点でしょう。旧石器時代はおよそ2万年近くある時代ですから、その期間の中での石器の移り変わりを見ることができます。また、石器がどのように作られたかを知る手がかりとなる「接合資料」は完成度が高く、当時の石器製作の様子を物語っています。

白滝産の黒曜石や白滝遺跡群で作られた石器が北海道内はもちろんのこと、遠くはサハリンや海を越えて本州に流通していることも、この時代に果たした役割を物語っています。こうして、北海道白滝遺跡群出土品は日本の旧石器時代を代表する文化財として、国宝にふさわしいという評価をいただきました。



大型尖頭器
(写真提供：道立埋蔵文化財センター)



「赤石山」の黒曜石の露頭



石器づくりの際に、当時の人が割った破片を組み合わせた「接合資料」

国宝指定1周年を迎えて

～遠軽町長 佐々木修一～

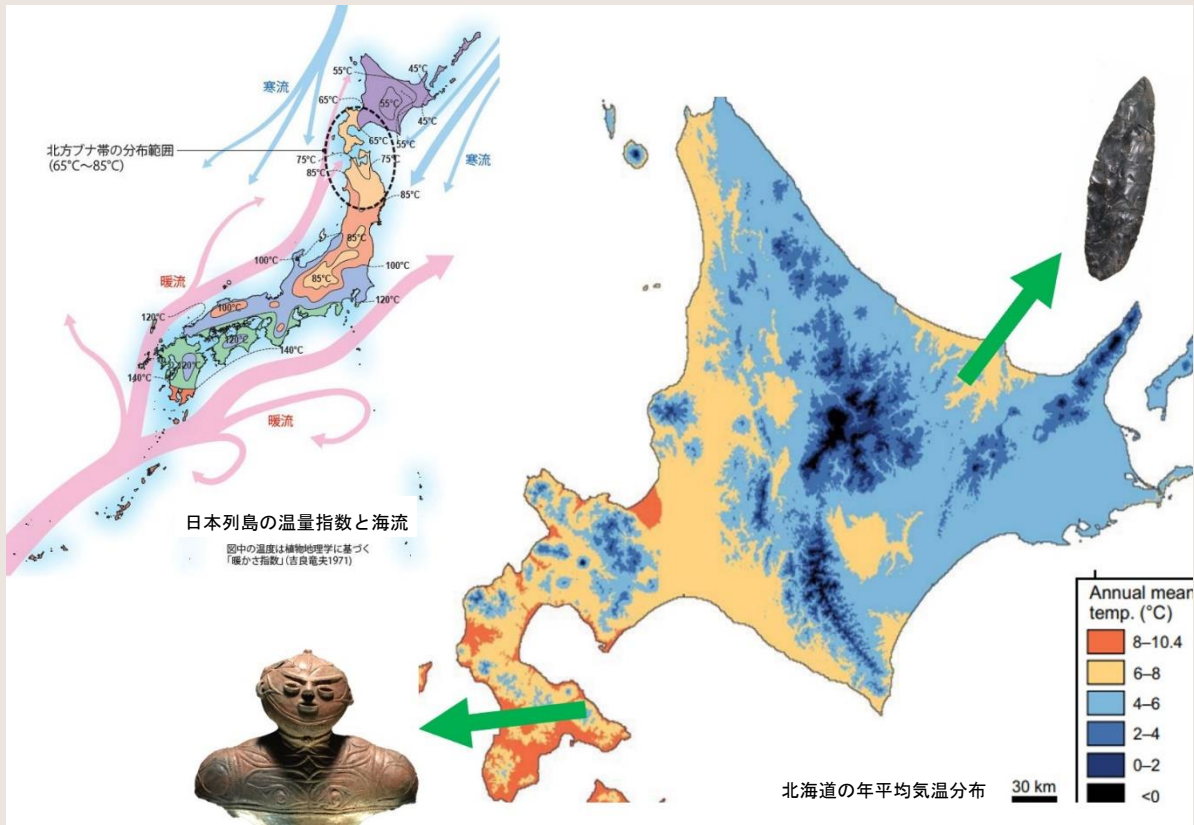


国宝指定された1年前、ちょうど黒曜石の国際シンポジウムが開催され、参加者の感嘆の声に

白滝の黒曜石が世界の宝であることを実感しました。旧石器時代の人々はこの石に向き合い、何を思いどのように石器を作り始めたのか。何を語りあいどんな交流をしたのか。そして、縄文の人々にどう受け継がれていったのか。かつてこの地に暮らしていた人々の姿を妄想しながら、壮大なストーリーを身近に楽しんでいただきたいと思います。

「黒いマチ」遠軽町でお待ちしています。

北と南の文化の交差点



アジア大陸の北東沿岸沖に細長く弧状に伸びる日本列島。北海道はその北端に位置しています。俯瞰してみると、南は列島最大の本州島、北はサハリン島、西は北方四島を経て千島列島と繋がるなど、人や文化が交差する地理的な環境にあります。

自然的な環境を見ると、北海道の中央部を走る日高山脈、大雪山系、天塩山地を境に、西と東では年平均気温や山の植生も異なっています。西の冷温帯葉広葉樹林と東の針広混交林といった具合です。

過去に遡ってみましょう。地球はおよそ10万年を一つのサイクルとして8万年の寒冷な氷期と2万年の温暖な間氷期を繰り返していました。直近の氷期で最も寒冷だったのは約2万年前です。氷期は氷床が発達した影響で海水面が現在より120メートルも低下していたため、北海道は大陸と繋がっていました。

この時期を旧石器時代と呼んでおり、人類は石器で作られた狩猟具を携えマンモスやバイソンなど大型の草食陸獣を追いながら大陸から北海道に移動してきました。旧石器時代における北海道は北に開いた玄関口だったわけです。

この時期、狩猟具の材料として最も使われたのが

ガラス質で鋭利な割れ口を持つ黒曜石で、遠軽町の白滝が著名な産地として知られています。

その後、およそ1万5千年前に地球規模の温暖化が始まり、環境変化（冬の積雪か）によって大型草食陸獣が絶滅します。一方、山は緑豊かな落葉広葉樹に代わり、海は海面上昇によって前浜が形成されるなど、周辺の自然から木の実や山菜、魚や貝などの食料を得られる環境が整いました。人類史でも稀な自然の恵みだけで定住生活を実現し、土偶づくりなど、高い精神性をもった縄文時代が始まります。

縄文時代の日本列島は自然生態系を基に6つ程度の地域文化圏が形成されていました。北海道は気温や植生の違いを背景として南西部と北東部で文化圏が異なっていました。世界文化遺産に登録された縄文遺跡群の範囲は、本州北部と共通の文化圏を形成していた南西部になります。縄文時代の北海道は南に開いた玄関口でもあったのです。

そうした意味で、北と南の文化の交差点である北海道において、縄文時代の中空土偶（函館市）と旧石器時代の白滝遺跡群の黒曜石（遠軽町）が国宝に指定されているのは、とても意義深いことだと思います。

（阿部千春）